

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520759

研究課題名（和文） 16世紀後期のドイツ語パンフレットと公論形成及び宗教対立との影響
関係の解明研究課題名（英文） Analysis of the Relationship between German Pamphlets, Public
Opinion Formation and Religious Conflicts in the Second Half of the Sixteenth Century

研究代表者

蝶野 立彦（CHONO TATSUHIKO）

早稲田大学・文学学術院・講師

研究者番号：90308148

研究成果の概要（和文）：16世紀後半のドイツ・ルター派地域において宗教対立が「民衆語パンフレットによる大衆的情報伝達と公論形成」にどのような変化をもたらしたかを分析した。

「口頭的・視覚的情報伝達手法を用いた反カルヴァン主義的パンフレットが1580年代に増加したこと」と「アウクスブルク宗教平和（1555年）とルター派諸領邦のカルヴァン主義化（1580年代以降）を契機にパンフレットへの規制強化が進んだこと」を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research analyzes how the religious conflicts transformed 'mass communication and public opinion formation by means of vernacular pamphlets' in the Lutheran areas of Germany in the second half of the 16th century. The results of the analysis show that the number of anti-Calvinist pamphlets using oral and visual transmission techniques increased in the 1580's and that the Peace of Augsburg (1555) and the introduction of Calvinism in some Lutheran territories (from the 1580's) occasioned strict censorship controls over pamphlets.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：ドイツ近世史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：宗教改革、公論、宗教対立、紛争、パンフレット、プロパガンダ、言論統制、マスコミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

ドイツ宗教改革史研究の分野では、1980年代以降、「広範な社会層への宗教改革思想の伝播を支えた情報伝達のメカニズム」に対する研究上の関心が高まり、そうした関心を背景にして「宗教改革期のプロパガンダ、コミュニケーション、書籍印刷」をテーマとする多くの研究が生み出されてきた。それらの研究を通じて「宗教改革思想の普及を支えた最も重要な情報媒体」と見なされるようになったのが、「ドイツ語を用いて著されたパンフレット」である。ルターなどの宗教改革者たちは、「中世期の神学的著述において一般的に用いられたラテン語」ではなく、「大衆の日常言語（民衆語）であるドイツ語」を用いて神学的著述をおこない、そうしたドイツ語テキストを「安価な仮綴じのパンフレット」に印刷して大量に流通させた。そのような宗教改革者たちの情報戦略こそが「広範な社会層への宗教改革運動の浸透」を生み出した最も重要な要因の一つである、との見解が、2000年代以降、ドイツ宗教改革史研究の分野では、通説としての位置を獲得するに至った。日本国内でも、ドイツ史研究者がこうした見解に基づく研究を発表してきた（森田安一『ルターの首引き猫』山川出版社、1993年；永田諒一『宗教改革の真実』講談社、2004年）。さらに、そうした宗教改革者たちの情報戦略の結果として、16世紀前期のドイツ語圏の社会に「社会全体を巻き込む公論」とそうした公論を支える「公共性のメカニズム」が生み出されるに至った、との見解が、2000年代前半にドイツ連邦共和国の近世史研究者によって提示され始めた（J. Burkhardt, *Das Reformationsjahrhundert*, Stuttgart, 2002, pp.48-64）。

このように、16世紀前半の宗教改革期の「民衆語パンフレット」と同時代の「公論形成」との間の歴史的影響関係をめぐって、1980年代以降、活発な議論がなされてきたにもかかわらず、16世紀前半の「民衆語による大衆的情報伝達と公論形成のメカニズム」が16世紀後半のドイツでどのような変化を遂げ、また、そのメカニズムが16世紀後期のドイツ語圏の社会にどのような影響を及ぼしたのか、という問題については、2008年

の段階ではまとまった研究がなされていなかった。16世紀後期は、ドイツにおいてカトリック・ルター派・改革派（カルヴァン派）という三大宗派（教派）の間の宗教対立が常態化するとともに、各宗派の内部でも宗教対立・紛争が繰り返された時代であり、そうした宗教上の対立に際しては、各宗派・党派のプロパガンダの手段として、大量のドイツ語パンフレットが流布された。こうした16世紀後半の「ドイツ語パンフレット」と同時代の「公論形成」や「宗教対立」との影響関係を解明することは、宗教改革期から宗教対立期にかけてのドイツの歴史的展開の道筋を明らかにするうえで重要な課題であるが、「16～17世紀のプロイセン公領」を分析対象とした Körber の研究（E.-B. Körber, *Öffentlichkeiten der frühen Neuzeit*, Berlin/New York, 1998）を除けば、2008年の段階では、日本国内でも国外でも、こうした問題設定に基づく本格的な研究はなされていなかった。本研究の研究代表者（蝶野立彦）は、2006年の博士論文と2006～2007年に発表した諸論考のなかで、主に1540年代～1570年代のルター派地域の宗教的・政治的紛争を取り上げて、神学者によるプロパガンダとそれに対する統治権力側の施策について分析をおこなった。そうした研究の成果を生かしつつ、上記のような問題設定に基づいて「16世紀後期ドイツにおける《ドイツ語パンフレット》と《公論形成》及び《宗教対立》との関係性」についての基礎的解明を試みるのが、本研究課題の申請時の研究コンセプトであった。

2. 研究の目的

本研究課題の申請時には、上記の研究コンセプトに基づいて、次の(1)(2)の課題を研究上の目標として設定した。(1)16世紀後半のドイツ語圏で出版されたドイツ語パンフレットのうち、「(a)宗教対立の下での宗教的プロパガンダを目的とする出版物」、「(b)ルター派地域での出版物」という二つの条件を満たすパンフレットを分析の対象としてリストアップしたうえで、特に「公論形成及び宗教対立への影響」という観点から重要かつ典型的特徴を有していると判断し

うるパンフレットをそのリストのなかから選定し、その収集作業をおこなうこと。(2)「①収集したパンフレットの内容及びテーマ上の特徴」、「②それらのパンフレットの大衆的情報伝達手段としての特徴及び有効性」、「③それらのパンフレットの出版・流通に対して為政者側が示した対応」という3つのテーマについて分析作業を進めること。

また、近年のヨーロッパ史研究では、18世紀ヨーロッパにおけるいわゆる「市民的公共性の成立過程」のモデルの妥当性をめぐって活発な議論がなされてきたが、「16世紀後期ドイツの大衆的情報伝達と公論形成のメカニズム」の解明を通じてそうした「近代的・市民的公共性の成立過程」をめぐる議論に対しても一定の寄与をおこなうことが、本研究課題の申請時の狙いの一つであった。

3. 研究の方法

本研究の実施にあたっては、「(I)16世紀後半にドイツ・ルター派の領域で出版された《宗教的プロパガンダを目的とするドイツ語パンフレット》の特徴についての包括的分析」「(II)《具体的な宗教対立事件に関連するパンフレットの出版・流通》と《それに対する為政者側の対応》についての個別的分析」「(III)《上記のパンフレットの大衆的情報媒体としての特徴》と《パンフレットの流通に対する為政者側の対応》が1550年代から1590年代にかけてどのように変化していったかについての通時的分析」という三段階の研究計画を立て、2009年度～2011年度にかけて、この三つの計画を順次実施した。

2009年度には、1983年～2000年に刊行された『ドイツ語圏で出版された16世紀の印刷物の目録』(Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des XVI. Jahrhunderts, Stuttgart, 1983-2000)とこの目録のデータに基づいて編纂・公開されているバイエルン図書館連盟のオンライン・データベース(http://www.gateway-bayern.de/index_vd16.html[2012年3月31日時点])を基礎的資料として用いつつ、同データベースにデータ登録されている約10万点の印刷物のなかから分析対象とすべきパンフレットを選定し、「(a)ドイツ連邦共和国の図書館での史料閲覧及び複写」「(b)マイクロ史料の利用(註1)」「(c)オンライン公開されたデジタル化史料の利用(註2)」という三通りの方法を併用して、300点のパンフレットの収集と分析をおこなった。このうちの(a)の作業の一環として、8～9月にバイエルン州立図書館

(Bayerische Staatsbibliothek[以下BSBと略])とアウグスト公図書館(Herzog August Bibliothek[以下HABと略])で閲覧・選定作業をおこなった。

2010年度には、《16世紀後半のドイツ・ルター派地域の宗教対立事件》に関する事例分析の対象として、「(i)1550年代～1560年代の《ドイツ・ルター派内部の宗教的分裂》とそれを収束させるための《ルター派諸侯による政治的介入》」「(ii)1580年代～1590年代のザクセン選帝侯による《カルヴァン主義化政策》とそれに反発するルター派信徒たちによる《反カルヴァン主義的プロパガンダ》及び《カルヴァン派信徒を標的とした都市暴動》」という二種類の事例を取り上げて、「それぞれの事件に関連するパンフレット」と「為政者側の対応について記された史料類」の収集と分析をおこなった。(ii)の事例に関する史料収集の一環として、9～10月にザクセン州立文書館の中央文書館(Sächsisches Staatsarchiv/ Hauptstaatsarchiv Dresden[以下SSHDと略])とザクセン州立図書館(Sächsische Landesbibliothek-Staats- und Universitätsbibliothek)で閲覧・選定作業をおこなった。

2011年度には、2009年度～2010年度の分析結果の《通時的な再構成と整理》をおこなうために、「①通時的分析に必要な補助史料(カトリック地域及び改革派地域で出版されたパンフレットや帝国議会資料など)の収集・分析」と「②《16～17世紀ドイツにおける公共圏の歴史の変容》に関する近年の研究結果の収集・分析」を進め、それらの分析結果を2009年度～2010年度の分析結果と比較・照合した。

註1: *Flugschriften des späteren 16. Jahrhunderts (Mikrofiche-Ausgabe)*, Leiden, 1990-.

註2: バイエルン州立図書館、アウグスト公図書館、ザクセン州立図書館のオンライン公開史料の他に、ザクセン-アンハルト大学・州立図書館(Universitäts- und Landesbibliothek Sachsen-Anhalt)のオンライン公開史料を用いた。なお、本研究の実施過程で上記の諸図書館において複写をおこなったパンフレットの複写データのほとんどは、各図書館の規約に従って、その後オンライン公開された。

4. 研究成果(註3)

註3: 各項目の記述内容に関わりのある重要なパンフレット・史料に関しては、「バイエルン図書館連盟のオンライン・データベースで用いられて

いる各パンフレットの資料番号(VD16～)ないし「各図書館・文書館の資料請求番号」を文中の括弧内に記載した。

(1) 16 世紀後半にドイツ・ルター派の領域で出版された《宗教的プロパガンダを目的とするドイツ語パンフレット》の総体的特徴

2009 年度～2011 年度に収集・分析の対象とした 350 点の「16 世紀後半にドイツ・ルター派の領域で出版された《宗教的プロパガンダを目的とするドイツ語パンフレット》(註4)」は、それぞれのパンフレットが関わりを持つ「宗教対立のコンテクスト」に応じて、4つのカテゴリーに分類することが可能である。その各カテゴリーのパンフレットについて、以下のような特徴が明らかとなった。なお、各カテゴリーの見出しの後の括弧内に記した数字は「総点数のうちの当該カテゴリーに属するパンフレットの点数」を示している。

註4:「ドイツ・ルター派の領域で出版されたパンフレット」のカテゴリーには、「(プロイセン公領などの)神聖ローマ帝国外の《ドイツ語を公用語とするルター派地域》で出版されたパンフレット」や「ルター派信徒の手で刊行された出版地不詳のパンフレット」も含まれる。

①ルター派内部の宗教対立に関わるパンフレット(150 点)

「パンフレットのテーマ」の観点から総括すると、1550 年代～1570 年代には「純正ルター派とフィリップ派の神学的対立」をテーマとするもの(VD16 W 2907 等)が、1580 年代には「和協信条をめぐる論争」をテーマとするもの(VD16 K 1028 等)が、1590 年代には「フーバー論争」をテーマとするもの(VD16 W 3708 等)が、それぞれこのカテゴリーのパンフレットの大部分を占めている。「情報伝達上の工夫」の観点から総括すると、「歌」や「表紙絵」などの「非識字層を意識した情報伝達手法」がほとんど用いられていないことが、このカテゴリーのパンフレットの特徴である。1550 年代後半～1560 年代前半には、「純正ルター派とフィリップ派の対立の収束」を目的として「神学者の言論活動に対するルター派諸侯による政治的介入」が試みられたが(「4.研究成果」の(2)の①を参照)、その過程で「為政者による言論規制条例」(VD16 S 1106 等)や「言論規制に対する神学者側の批判文」(VD16 H 3151, F 1532 等)がパンフレットとして出版された。

②プロテスタントとカトリックの宗教対立に関わるパンフレット(73 点)

「情報伝達上の工夫」の観点から総括すると、

「時事的報道文(Zeitung や Bericht など)」の形式を用いたものが数多く存在することが、このカテゴリーのパンフレットの特徴である。「パンフレットのテーマ」の観点から総括すると、「カレンダー紛争」(VD16 K 2738 等)や「ケルン戦争」(VD16 ZV 11559 等)などのドイツ語圏内部の宗教対立事件のみならず、「サン・バルテルミの虐殺」(VD16 W 222 等)や「ネーデルラントの新教徒のカトリックへの抵抗」(VD16 K 1245 等)や「スペインの異端審問」(VD16 N 615 等)などのドイツ語圏の外部の諸事件までもが、「反カトリックのプロパガンダ」の題材として用いられている。また、1585 年に日本の天正遣欧使節団が教皇と謁見したことをきっかけにして、1585 年以降、「日本からの遣欧使節」や「日本」をテーマとしたドイツ語パンフレットがカトリック地域で相次いで出版されているが(VD16 A 143, C 6590 等)、1585 年には同遣欧使節に関するルター派神学者の批評文がパンフレットとして出版されており(VD16 A 142)、これらの事実から、「天正遣欧使節団の訪欧」という事件がカトリックとプロテスタントの双方の宗教宣伝の題材として用いられていたことが確認できる(註5)。

註5:本研究の調査の過程で、16 世紀の日本の武将(織田信長、大友宗麟)を題材にした学校劇や市民劇(17～18 世紀にドイツ・カトリック地域で上演されたもの)の内容を記した複数のパンフレットがバイエルン州立図書館に所蔵されていることを確認した(BSB: 4 Bavar. 2194,I,1/58 や BSB: SLG.Her 2597 等)。

③ルター派と改革派(カルヴァン派)の宗教対立に関わるパンフレット(111 点)

通時的視点からこのカテゴリーのパンフレットの点数の推移を概観すると、プファルツ選帝侯領における『ハイデルベルク教理問答』の刊行(1563 年)とザクセン選帝侯領における隠れカルヴァン主義紛争(1570 年代前半)をきっかけにして、1560 年代～1570 年代に、少なくとも 6 点の「ルター派神学者の手になる反カルヴァン主義的パンフレット」が出版されている。その後、1580 年代～1590 年代には、ザクセン選帝侯領を初めとする諸領邦で《カルヴァン主義化政策》が押し進められたことをきっかけに(「4.研究成果」の(2)の②を参照)、「反カルヴァン主義的パンフレット」の出版点数が急増する。そして「情報伝達上の工夫」の観点から総括すると、「歌」(VD16 N 1231 等)や「対話」(VD16 ZV 16793 等)や「表紙絵」(VD16 J 312, E 1183 等)や「図」(HAB: A: 466.50 Theol. (5))や「喜劇」(VD16 M

5336 等)などの「非識字層を意識した情報伝達手法」が多用されている点が、1580 年代～1590 年代の反カルヴァン主義的パンフレットの特徴である。

④その他のパンフレット(16 点)

上記①②③のカテゴリーのパンフレットの他に、「トルコ人によるキリスト教徒迫害」(VD16 ZV 28203 等)、「再洗礼派」(VD16 W 2066)、「パラケルスス論争」(VD16 ZV 25884)をテーマとするパンフレットも収集・分析の対象とした。「情報伝達上の工夫」の観点から見ると、「トルコ人によるキリスト教徒迫害」をテーマとするパンフレットの特徴は、「歌」による情報伝達手法が多用されていることである。

(2)16 世紀後半の宗教対立事件をめぐる《パンフレットの出版・流通》と《為政者側の対応》のメカニズム

①1550 年代～1560 年代の《ドイツ・ルター派内部の宗教的分裂》をめぐる展開

1550 年代～1560 年代の《ドイツ・ルター派内部の宗教的分裂》を契機とするパンフレット流通とそれに対する為政者側の対応を分析した結果、以下のようなメカニズムが明らかになった。(a) 1540 年代末～1550 年代にドイツのルター派神学者のあいだで神学論争・対立が繰り返され、神学者たちは論敵を批判するために多くのパンフレットをルター派地域で出版した。(b) 1557 年のヴォルムス宗教討論会の場で「ルター派神学者どうしの対立・反目」がカトリック神学者・諸侯に露見したことをきっかけに、カトリック神学者たちは、「ルター派の内部分裂の実態」を公論にアピールすべく、ドイツのカトリック地域で多くのパンフレットを出版した(VD16 V 2326 等)。(c) ルター派諸侯は、「ルター派の内部分裂」の風評が神聖ローマ帝国各地に広まることによって「1555 年のアウクスブルク宗教平和で保障されたプロテスタント(ルター派)帝国等族の宗教的権利」が脅かされることを危惧し、同権利の維持を目的にして、1558 年～1561 年のプロテスタント諸侯会議において「ルター派の宗教的一体性」を公論に向けてアピールするとともに、ルター派神学者どうしの論難行為に歯止めをかけるための言論規制措置を講じた。(d) 一部のルター派神学者たちは、こうした言論規制措置に反発し、そうした措置を批判するパンフレットを相次いで出版したが(VD16 D 552 等)、このようにして生じた為政者と神学者との対立が引き金となって、ルター派諸都市で紛争が発生した。

②1580 年代～1590 年代の《ザクセン選帝侯によるカルヴァン主義化政策》をめぐる展開

1580 年代～1590 年代の《ザクセン選帝侯によるカルヴァン主義化政策》を契機とするパンフレット流通とそれに対する為政者側の対応を分析した結果、以下のようなメカニズムが明らかになった。(a) 1586 年～1591 年に《ザクセン選帝侯領のカルヴァン主義化》を推進したザクセン選帝侯クリスチャン 1 世は、《カルヴァン主義化》政策に対する批判的公論の台頭を防ぐために、1588 年 8 月に「神学者の言論活動の規制」を目的とした選帝侯条例を発布した(SSHD: Geheimer Rat (Geheimes Archiv), Loc. 7418/02, Bl.8)。(b) だが、そうした規制措置にもかかわらず、ザクセン選帝侯領の外部地域で出版された多くの反カルヴァン主義的パンフレットが、ザクセン選帝侯領内に持ち込まれ、密売された。たとえば、1591 年 4 月には、ライプツィヒの大市で非合法的な文書を販売した咎でマクデブルク出身の書籍商が拘束されたが、その際にザクセン選帝侯がライプツィヒ市参事会に書き送った指令書のなかには、「販売を規制すべき文書」として 14 点の反カルヴァン主義的パンフレット(VD16 R 2974 等)のタイトルが挙げられている(SSHD: Geheimer Rat (Geheimes Archiv), Loc. 9710/27, Bl.146)。(c) 1591 年 9 月のクリスチャン 1 世の死をきっかけに、ザクセン選帝侯領内では反カルヴァン主義運動が台頭し、カルヴァン主義への同調者を名指しで非難するパンフレット(VD16 C 4953 等)が流通するとともに、ライプツィヒでは、1593 年 5 月にカルヴァン主義者を標的にした都市暴動が発生した(SSHD: Geheimer Rat (Geheimes Archiv), Loc. 9717/3)。(d) 1593 年に出版された反カルヴァン主義的パンフレット(VD16 S 4626)にはライプツィヒ暴動に関する記述が取り入れられ、「ライプツィヒ暴動に関する時事的報道」が反カルヴァン主義プロパガンダの題材として用いられた。

(3) 研究成果の位置づけと今後の展望

「1. 研究開始当初の背景」でも指摘したように、2008 年の段階では、日本国内でも国外でも、「16 世紀後半のドイツにおけるドイツ語パンフレットと公論形成と宗教対立の影響関係」については、僅かな研究しかなされていなかった。本研究の開始後の 2009 年には、「1580 年代のケルン戦争期の宗派間のプロパガンダと公論形成との関係」に焦点を合わせた Schnurr の研究 (E.-M. Schnurr, *Religionskonflikt und Öffentlichkeit*, Köln/ Weimar/ Wien, 2009) が発

表されている。このように、「16 世紀後期のドイツにおける宗教対立と公論形成の関係」について、近年、少しずつ研究が進められつつあるが、2012 年 3 月の時点でも、このテーマに関しては、まだ限られた研究しかなされてはいない。そうした研究状況のなかにあつて、本研究の実施によって、「16 世紀後期のドイツ・ルター派領域におけるドイツ語パンフレットと宗教対立と公論形成の影響関係」について、次のような新たな研究上の知見を得ることができた。(a) ザクセン選帝侯領を初めとする幾つかのルター派領邦における「カルヴァン主義化政策」の推進をきっかけにして、1580 年代以降、反カルヴァン主義的パンフレットの出版点数が急増し、それらのパンフレットのなかで、「歌」や「対話」や「表紙絵」のような「非識字層を意識した情報伝達手法」が多用されたこと。(b)「1555 年のアウクスブルクの宗教平和の締結」と「1580 年代以降のルター派諸領邦のカルヴァン主義化」を契機として、「パンフレットが公論に及ぼす影響」を危惧した為政者たちが、「宗教的プロパガンダを目的とするパンフレットの出版・流通」に対する統制措置を強化したこと。

以上のような研究成果を踏まえるならば、さらに次のような新たな研究上の課題を示しうる。(a) 16 世紀後期のドイツ・ルター派領域のドイツ語パンフレットの特徴を、それ以前の時代(初期宗教改革期や 1530 年代～1540 年代)のパンフレットの特徴と比較し、その特徴の変化を通時的に跡づけること。(b) 16 世紀後期の《ドイツ・ルター派地域の為政者たちによる言論統制措置》が 17 世紀前半(とりわけ 30 年戦争期)にどのように変化していったかを分析すること。(c) 本研究では、研究対象を主に「16 世紀後期のルター派地域のドイツ語パンフレット」に限定したが、同時期の「カトリック地域のパンフレット」「ラテン語パンフレット」「一枚刷りのビラ」についても、本研究と同様の問題設定に基づいて検討をおこなう必要がある。(d) 「4. 研究成果」の(1)の②で指摘したように、本研究の調査の過程で、1580 年代のドイツにおいて「日本の天正遣欧使節団の訪欧」という事件がカトリックとプロテスタントの双方の宗教宣伝の題材として用いられていたこと、さらに 17～18 世紀に 16 世紀の日本の武将を題材にした劇がドイツのカトリック地域で上演されていたことを確認できた。こうした事実を踏まえるならば、近世のドイツ語圏の大衆的情報媒体において「日本の諸事件」がどのように報じられ、それらの媒体を通じていかなる「日本」イメージが

流布されていたかを解明することは、「近世期の日欧関係」の分析に際して重要な研究課題となるであろう。

また、「3. 研究の方法」でも述べたように、本研究の実施に際しては、「16 世紀のドイツ語圏の印刷物に関するバイエルン図書館連盟のオンライン・データベース」と「ドイツ連邦共和国の各図書館がオンライン公開しているデジタル化史料」を活用したが、オンライン公開された史料・データ類を歴史研究の手段として有効に活用することも、今後の 16 世紀ドイツ史研究の推進のための重要な課題となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 2 件)

①蝶野立彦、16 世紀後半のドイツ・プロテスタント地域における宗教政策と公論——プロテスタント神学者たちの《誹謗的言説》をめぐって、日本西洋史学会第 61 回大会、2011 年 05 月 15 日、日本大学文理学部(東京都)

②蝶野立彦、歴史のなかの《事実》と《虚構》、早稲田大学史学会・連続講演会「わたしと歴史学、わたしと考古学」、2009 年 5 月 25 日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都)

[図書] (計 1 件)

①蝶野立彦、他、朝日出版社、規則的、変則的、偶然的——大久保進先生古稀記念論文集、2011 年、465 - 491

6. 研究組織

(1) 研究代表者

蝶野 立彦 (CHONO TATSUHIKO)
早稲田大学・文学学術院・講師
研究者番号：90308148

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号